


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 6 月 10 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生 2 年
氏 名	小林宜弘

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本・屋久島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
屋久島実習・野生ヤクシマザルにおける食性の調査
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 18 日 ~ 平成 26 年 5 月 26 日 (9 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学屋久島観察所
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航では、屋久島実習の一環として野生ヤクシマザルにおける食性の調査をおこなった。 屋久島にすむ野生ニホンザルの観察や糞採集を通して、野生動物を対象としたフィールド調査の基本を学んだ。また海外からの招聘者と一緒に調査を行うことで、今後海外でのフィールド調査を行う際に必要となる英語コミュニケーション能力を高める、とてもいい機会となった。 調査の目的は、次世代シーケンサーを用いた糞サンプルの DNA 分析を行うことを前提として、古くから採食生態学的手法として用いられてきた、直接観察と糞分析による野生のヤクシマザルの食性調査を行うこと、加えてこれらの手法のメリットとデメリットを明らかにすることであった。 フィールド調査は 5 月 20 日~23 日の 4 日間、屋久島の西部林道付近で行われた。西部林道にある道路上を歩き、途中道路沿いでヤクシマザルを発見した際、調査対象個体を決定して追跡し、直接観察によりヤクシマザルの行動および食物の記録を行った。また同時に、対象個体が排泄した糞の採集も行った。採集した糞は屋久島観察所へ持ち帰り、糞分析による食物の記録を行った。 調査の結果、直接観察において同定できた採食品目は植物 12 種であった。この他に虫とキノコを食べる様子が観察されたが、これらはヤクシマザルによって短い時間で完食されてしまい、その種の同定は困難であった。次に糞分析において、植物 2 種のみ同定することができた。糞サンプルの中から植物の繊維や虫の体の一部などを多数見つけることができたが、これらの種を同定する事は出来なかった。糞分析では、特定できる食物は未消化物に限られてしまうことに加えて、出てきた食物の一部と元の状態のものを照らし合わせて判断する必要があるため、直接観察よりも正確に種を同定することは困難であった。 今後の予定として、今回行った野生のヤクシマザルにおける食性調査の成果を報告する予定である。また今回の調査結果は、ゲノム実習で行う次世代シーケンサーによる採食品目の同定結果と比較する。

図 ヤクシマザルのグルーミング

6. その他 (特記事項など)

屋久島実習のヤクシマザルの調査に協力して下さった、阿形 清和先生、岸田 拓士先生、澤田 晶子さん、鈴木 真理子さん、鈴木 崇文さん、早川 卓志さん、栗原 洋介さんにお礼を申し上げます。

<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org